

■ 編集だより

編集後記

近年、精神神経学雑誌（以下、本誌）への投稿数が増えてきている。結構頻繁に投稿して下さる先生も少なくなく、投稿がなければ雑誌も成り立たないので、一編集委員として大変ありがたく感じている。以前は、査読が厳しいとの風評で投稿を忌避されていたのは否めないが、優れた論文を積極的に掲載していくという方針のもと、査読も非常に支持的となってきた。それでも原著論文の投稿は少なく、その掲載は稀ともいべき状況で、こうしたことがPubMedから本誌の掲載が外された大きな原因となっており、この解決が本誌にとって最重要課題の1つとなっている。ところが、こうした和文誌における問題は精神医学領域に限ったことではなく、他の医学領域でも程度の差はあれ同様であるらしい。

日本語の医学原著論文が減ってきている原因は、皆が英語論文で書こうとするからである。企業は比較的早くから定期人事考査を行っているが、最近では大学でもそのシステムが導入され、臨床や教育などいろいろな業務実績が点数化される。研究業績も同様だが、英語論文と日本語論文ではその評価に大きな差がある。近年の研究は競争的研究資金で実施されることが多いが、成果として英文論文を求められることもあるようだ。医学博士論文も英文と決められているところが増えてきている。これでは、敢えて日本語で原著論文を書こうという人は少なくなるに決まっている。加えて、研修医・専攻医向けの教科書には、英文誌のほうが最新の知見に触れられる、和文誌はエビデンスレベルが混在している、といった厳しい指摘が掲載されていたりもする。これでは本誌も一世を風靡した大衆雑誌のように廃刊一直線なのか。

しかし、日々の臨床や研究活動のなかで、日本語の論文を求められることは案外多い。「先生がこの前話していた研究について、日本語で書いたものはありませんか」とよく尋ねられる。精神科は他の科に比べて多職種連携が欠かせないが、メディカルのスタッフに、このように求められることが少なくない。研修医に向けて、慣れないうちから英語と専門知識の2つの壁に対峙するのは得策ではない、と書かれている教科書もある。医局員が教員医師の論文や研究内容をほとんど知らないという話もよく聞く。日本語による原著論文も、実は結構求められているように思える。

上述の状況を踏まえ、「容認される二次出版 (acceptable secondary publication)」について、本誌でも検討してみても良いのではないかと。すでに発表した論文については、言語を変えたとしても通常は「多重出版 (duplicate publication, 本質的に同じ内容の論文を繰り返し出版すること)」として不正行為に該当してしまう。しかし、両方の雑誌からの許可、二次出版の論文が異なる読者を対象としている、初版論文に対する忠実性、などの条件を満たせば、日本語から英語、英語から日本語への出版の可能性がない訳ではない。学会員による優れた英語論文を、日本語で本誌に掲載するのはどうだろう。

その他に、より本質的に、本誌に対する学会員の「親しみ」を向上させる必要もあろう。雑誌の表紙がリニューアルされるのも一役買ってくれるとうれしいのだが、紙媒体から電子版掲載への単なる移行に留まらず、SNS (social networking service) の利用や連携など、それに疎い私が言うのも何だが、今後積極的に推進していくことが不可欠だと考える。先人から長く受け継ぐ本誌を絶やさないためにも創意工夫と、たとえの良否は別として、織田信長に追われても決して諦めない足利義昭のような粘り腰が必要であろう。